ほのか通信
２０１４年夏号

男鹿葬祭ホール ほのか 通信

ほのか通信第６号
発行責任者　富田猛
電話：0185 - 25 - 3666
ｆａｘ：0185-25-2172

# 死者供養の仏事

ほのか会員の皆様、こんにちは（＾＾）男鹿葬祭ホールほのかの冨田猛です。日に日に暑さが増し、いよいよ夏本番が来ました。会員の皆様は暑さに負けず熱中症に注意してお過ごし下さい。さて、今回のほのか通信第６号は、お盆も近いということで、亡くなった方の供養と仏事についてです。

日本人は死者供養を大切にしてきた民族であるといえます。歴史的には、中陰の七仏事（初七日、二七日、三七日、四七日、五七日、六七日、七七日）はインドに起源をもちます。中国に仏教が伝わり、百カ日、一周忌、三回忌（満２年）の三仏事が加わり十仏事となりました。さらに、日本で七回忌、十三回忌、三十三回忌が加わり、十三仏事となり、近世に十七回忌、二十五回忌が加わり、十五仏事となりました。しかし、十五仏事は完全に一般化しているとは言えず、二十三回忌、二十七回忌などに回忌法要を営むこともあります。七回忌の後が十三回忌なのは七回忌の７年目であるため、それに引き続く十七回忌は７の数字がつくからと言われます。

五十回忌以降、五十年ごとに行われる法要を遠忌（おんき）と言い、宗派の祖師の場合などに限って営まれています。

このほか、祥月命日（故人の命日）と月忌（月の命日）があります。また、お盆や春秋のお彼岸があります。

## 十王信仰

亡くなった方は７日ごと、百カ日、一周忌、三回忌に十王の審判を受けるが、遺族の追善供養の力により地獄に落ちることを免れるという十王信仰が日本で広まったのは１１世紀以降と言われます。これは偽経（ぎきょう）と言われる「地蔵十王経」が非常にもてはやされたことによります。１０世紀頃中国で作られた「十王経」の影響を受けたもので、そこから閻魔王が死後の世界の支配者、審判官あるとの信仰と道教などが混じりあった十王信仰が生まれたと言われています。

初七日には秦広王（しんこうおう）本地・不動明王（本地とは「おおもとの仏」の意）の審判を受け行方定まらないものは三途の川を渡り、二七日に初江王（しょこうおう、本地・釈迦如来）の審判を受け、ここでも定まらないと順に、三七日に宋帝王（そうていおう、本地・文殊菩薩）四七日に五官王（本地・普賢菩薩）五七日に閻魔王（本地・地蔵菩薩）六七日に変成王（へんじょうおう、本地・弥勒菩薩）七七日に泰山王（たいざんおう、本地・薬師如来）の審判を受けます。

この王の下で地獄、餓鬼（がき）、畜生、修羅、人間、天上の六道のいずれか決定されるので、四十九日の追善供養は特に懇ろに行う必要があると説きます。これでも行方が定まらないと百カ日に平等王（びょうおうどう、本地・観世音菩薩）、ここでも定まらないと、一周忌に都市王（としおう、本地・勢至菩薩）の下に行くとされますが、これはひとえに遺族の追善供養のおかげで、一周忌の功徳により三回忌の五道転輪王（ごどうてんりんおう、本地・阿弥陀如来）に送られます。そして充分に追善供養すれば成仏できる、としています。これに加えて七回忌、十三回忌、三十三回忌が一般化すると「十三仏抄」が偽作されました。

遺族が地獄に落ちる恐怖が追善供養を一般化することを促したことも事実ですが、時代が変わっても受け入れられているのは、亡くなった人を覚えておきたいとする人々の想いと重なったからでしょう。

葬儀概論から一部抜粋

## 編集後記

近頃、気温も高く毎日が少しづつ夏に近づいて来ていますね。そんな暑い夏でも、私達はスーツを着用して、ご葬家様のお手伝いをさせていただいております。私はシャツも白シャツに長袖のものを着用していますが、よくお客様に「その格好で暑くないの？」と聞かれます。実は正直に言って、めちゃくちゃ暑いです・・夏場にスーツを着てお手伝いをさせていただきますが、もう慣れっこなのか職業病なのか最初は暑く感じても、慣れてくるとあまり感じないのは職業病ですね。